九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アンドレ・ジッドにおける反ロマン主義 : 1920年代の古典主義・ロマン主義論争

西村, 友樹雄
東京経済大学 : 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/6632409

出版情報：Stella. 41, pp.93-112, 2022-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l'Université du Kyushu
バージョン：
権利関係：

アンドレ・ジッドにおける反ロマン主義
―― 1920 年代の古典主義・ロマン主義論争――

西　村　友 樹 雄

アンドレ・ジッドは，『政治的・文学的・芸術的ルネサンス』誌（以下「『ルネサンス』誌」と略記）1921 年 1 月 8 日号に掲載された記事「ロマン主義と古典主義についてのアンケート」のなかで以下のように述べている――

> 私たちが好んで古典主義的と呼んでいる美点は，とりわけ道徳的な美点のように私には思われます。そして私は進んで，古典主義を，様々な美徳が調和よく束ねられたものだと考えますが，それらの徳のなかで第一のものが謙遜です。ロマン主義は常に傲慢さ，自惚れを伴っています。
>
> 〔…〕古典主義とロマン主義との間の戦いは各人の精神の内部にもまた存在する，と考えることは重要です。〔…〕古典主義的な芸術作品は，内なるロマン主義にたいする秩序と節度の勝利を物語っています。[1)]

この引用で注目したい点は 2 つある。まずジッドが，古典主義をそれ単体で捉えず，その対立物であるロマン主義の存在を前提としている点。もうひとつは，古典主義に正の価値づけ（「謙遜」）を，いっぽうロマン主義には負の価値づけ（「傲慢さ」「自惚れ」）を行っている点である。本稿が注目するのは，こうした古典主義観に代表される，ジッドの「反ロマン主義」と呼びうる側面である。

ジッド美学における反ロマン主義的側面を取り上げた先行研究は数多く存在する。たとえば，1935 年の時点でヒューゴー・フリードリヒは，ジッドがもっぱら美学的な観点から反ロマン主義を捉えていると述べ，政治的な側面を重視するナショナリストたちとの違いを指摘していた[2)]。またミシェル・ミュラは，ジッドの古典主義に「ロマン主義の寄与」が含まれていると述べているが，一方で彼の美学がシャルル・モーラスのそれと似通った反ロマン主義を通過したうえで形成されたことを見逃してはいない[3)]。本稿の目的は，これらの研究をふまえつつ，古典主義とロマン主義とをめぐって 1920 年代に展開された主要な

文学論争，およびこれを受けて行われたアンケートを通してジッドの反ロマン主義を捉えなおし，その諸相と射程とを検討することにある。

ジッドにおける反ロマン主義の形成過程

ジッドは『ルネサンス』誌の「アンケート」ではロマン主義を決して肯定的に捉えてはいないが，かかる姿勢は作家活動当初からのものではない。たとえば，若き日のジッドはショパンの楽曲の「絶望」について，それによって引き起こされた情動に導かれながら，熱に浮かされたような筆致で語っている。後のジッドであればここに自らのロマン主義的な要素を見出したことだろう――

> ああ！ ショパンのこの前奏曲（私は第3番のことを言っている）は，苦悩以上のものだ。永遠に魂をさいなむ，陰鬱で打ちのめされた悲しみによる泣きぬれた嘆き節だ。叫び声もなく，苦痛に満ちた，長々と続くひとつの音，しゃくり声だけがそれをさえぎるようなひとつの音だけがある〔…〕。
>
> これは，自殺に至らしめるような絶望，涙が宥（なだ）めることのできない絶望だ。[4)]

だがこうした傾向は，『アンドレ・ワルテルの手記』（1891）で作家としてデビューした後，次第に薄れていく。ジッドは，1926年に公刊した自伝『一粒の麦もし死なずば』の第2部で，ロマン主義への嫌悪と古典主義への憧憬とが，青年期にアフリカへと出立する前に萌していた，と振り返っている――

> 疑い，混乱，ロマン主義，そして憂鬱。私たち〔ジッドと友人の画家ポール＝アルベール・ローランス〕はこれらすべてにうんざりしていた。これらすべてから抜け出したかった。〔…〕そして，思い出すのだが，出発前にしていた会話のなかで，私たちは調和，横溢，健康への理想に突き動かされていた。思うにそれは，今日「古典主義」と呼ばれるものへの私の最初のあこがれだった。[5)]

ここで「ロマン主義」は，「疑い」「混乱」「憂鬱」と並列され，「今日「古典主義」と呼ばれるもの」としてまとめられた「調和，横溢，健康への理想」の対極に位置づけられている。実際，アフリカへ旅立つ1893年に書かれた『日記』からは，ロマン主義的なるものに魅惑された日々を思い出しながらも，その圏内から脱しようとするジッドの姿が浮かび上がる――

> 私たちは，また恥知らずにもロマン主義的であり，ルネのように夢見心地で，私も彼

も，自分たちの人生に打ち寄せる嵐と海風とを期待し，待ち望んでいた〔…〕。
……私は今年には生の方へ力強く向かいたいと，自分が好いと思った生に己を投げ出したいと望んだ。[6)]

これ以降に書かれたジッドのテクストには，「今日「古典主義」と呼ばれるもの」への言及が散見する。たとえば1897年の「文学とモラル」では，「均衡，それは完全な「健康」である」[7)] と述べている。また，1902年に『メルキュール・ド・フランス』誌が行った「ドイツの影響についてのアンケート」への回答では，「フランス的古典主義」[8)] を称揚している。とはいえ，これらの意見にロマン主義にたいするはっきりとした反感を見てとることは難しい。

ジッドが「ロマン主義」の語を否定的に用いるのは1907年のことであった。当時の『日記』には次のような一節が認められる——

〔リヒャルト・シュトラウスの『サロメ』は〕おぞましいロマン主義音楽で，ベリーニを愛させてしまうな，オーケストラによる巧みな饒舌だ。〔…〕ラセールもまた，ユゴーが滑稽な豪放磊落さに抜きん出ていることを指摘している。——〔ワーグナーの〕『マイスタージンガー』も同様で——同じものが原因となっている。そしてそれらは複数の欠陥の原因でもある。すなわち，使われている方法の慎みのなさと効果の単調さ，うんざりさせるようなしつこさ，一目瞭然の不誠実さだ。ユゴーにせよ，ワーグナーにせよ，ひとつの考えを表現するためのいくつか隠喩が頭に浮かぶと，それらを吟味すること，ひとつたりとも除外することはないだろう。[9)]

この箇所でピエール・ラセールの名が登場しているのは偶然ではない。ラセールは，『アクション・フランセーズ』紙の寄稿者であり，1907年には博士論文を『フランスのロマン主義』として公刊している[10)]。ロマン主義にたいする苛烈な批判に貫かれ，その後の反ロマン主義言説にも大きな影響を与えたことで知られるこの著作を，ジッドは出版後ほどなくして読んでいたと考えられる[11)]。

2年後の1909年，ジッドは『新フランス評論』誌6月号掲載の「ナショナリスムと文学」で，ロマン主義への反感を公言することとなる。ラセールの名はそこで再び引用されているが，彼への評価は決して高くない[12)] ——

たしかに私はラセール氏の本を賞賛した。しかしそれは，私が個人的にロマン主義と芸術的アナーキスムを嫌悪したからだ。この嫌悪は，それらがフランス的性質をほとんど帯びていないためだろうか？——フランス人的な私の脳が嫌うその見苦しい性質

のためだ，としておく程度で私は十分なのだ。[13)]

「ナショナリズムと文学」と題された記事は，これを含めて全部で3回掲載された。それらのなかでジッドは，古典主義をフランス的なるものとして称揚するナショナリストに一定の理解を示しつつも，個性を利己的なものとして軽視する姿勢や，フランス古典主義の名のもとで括(くく)られる特定の美学のみを評価する姿勢を厳しく批判している。前者については，アイスキュロスやダンテといった詩人を取り上げ，彼らが国民的であると同時にこれ以上ないほどに人間的かつ個性的であると主張する。ここから引き出される結論は，個性的であることは国民的であることを妨げるのではなく，むしろその前提であるというものだ[14)]。後者については，17世紀フランス文学において規範とされたものをむやみにありがたがるのではなく，それ以外の様々な価値観にも開かれるべきだとジッドは主張するのである[15)]。

こうして1900年代後半以降のジッドは，時にナショナリストたちとの対話を試みつつ，彼らとは異なる反ロマン主義を提出しようとしていたが，当時は彼がアクション・フランセーズに最も接近した時期であり[16)]，大戦中の1916年には，アクション・フランセーズとの連帯を公言するほどになる。しかしこの連帯も，国家存亡の危機を前にした一時的なものにすぎず，終戦を契機に解消される。次節で見るように，1920年代のジッドは，シャルル・モーラスの古典主義観を名指しで批判するなど，両者の対立は明確なものとなるのである。

『ルネサンス』誌のアンケート――モーラス的反ロマン主義との差別化

大戦後，ロマン主義は様々な立場から攻撃の対象とされた[17)]。1919年7月には，アクション・フランセーズ一派が「知性党のために」を発表し，「自由主義的かつ無政府的混乱」に抗して，「あらゆる高度な人間性の教義の本質」である「古典主義的精神」の必要性を訴えた[18)]。また『ベルフェゴール』（1918）でロマン主義的美学を批判したジュリアン・バンダは，『フランスのロマン主義』で展開されたロマン主義批判が手ぬるかったことが昨今の「文学的ロマン主義」の勃興を招いたと主張し，ラセールを批判[19)]。いっぽうジャック・リヴィエールは『新フランス評論』誌で，ロマン主義の功績を認めながらも，「ロマン主義とともに始まった美学の時代」[20)] が完全に過去のものになったと宣言した。

こうした状況のもと，レイモン・ド・ラ・タイエードとモーラスとの間で論争が起こる。両者はいずれも，ジャン・モレアスを創始者のひとりとするローマ派に属していた人物である。冒頭で引用した『ルネサンス』誌のアンケートは，この論争に反応して行われたものであった。

論争の過程を手短に確認しておこう。直接の発端となったのは『ルネサンス』誌 1920 年 9 月 4 日号に掲載されたラ・タイエードの記事である。第三共和制成立 50 周年を記念した同号で，論者は 1870 年以来の詩の歴史を総括し，ロマン主義を「言語的なロマン主義」と「理想的なロマン主義」とに分類したうえで，前者を退け，後者を「詩そのもの」と見なして称揚する。ラ・タイエードによれば，モレアスはこの「理想的なロマン主義」と古典主義を接合することができたのである。モレアス自身は「ローマ派宣言」のなかで「ロマン主義によって断ち切られた「ガリア的鎖」をつなぎなおす」ことを主張したが[21]，ラ・タイエードの説では，彼が実際に批判していたのは「言語的なロマン主義」なのだ[22]。

この主張にたいしモーラスは『アクション・フランセーズ』紙 1920 年 9 月 10 日号で反論する。モーラスは，ラ・タイエードのロマン主義擁護の姿勢を批判しながら，彼の提示した「理想的なロマン主義」なる概念が不正確であり，ロマン主義固有のものとは関係ないようにみえると指摘した[23]。以降も両者は，ロマン主義の語の定義・用法などをめぐって紙面上で論を戦わせるが，その主張は平行線をたどった。

この論争を収拾すべく，発端となった『ルネサンス』誌がアンケートを行い，28 人から回答を得た。担当は 1913 年にアンケート集『若者は何を夢見ているのか』を出版していたエミール・アンリオである。回答の一覧は同誌 1921 年 1 月 8 日号に「ロマン主義と古典主義にかんするアンケート――レイモン・ド・ラ・タイエードとシャルル・モーラスの論争について」としてまとめられた。

アンリオによれば，アンケートの目的は以下の点に集約される――「古典主義的であるべきか，それともロマン主義的であるべきか。それはなぜか。もしくはこの質問自体がばかげているのか」[24]。たしかに回答者のなかには，「ばかげている」とまでは言わぬまでも，問いそのものを問い直す者もいた。詩人ポール・フォールや文学史家ギュスターヴ・ランソンがその例である[25]。一方で，ロマン主義に批判的な立場をとる者もおり，当然ながらラセールなどはここに属する[26]。その外の回答者は基本的に古典主義に伝統や規範としての価値を見

出しつつも，それを絶対視することを避け，ロマン主義との折衷を模索する立場をとっている[27]。そうしたなかで，ジッドの回答は，ラセールらよりは穏健でありながらも，「自惚れ」などの否定的なニュアンスの語と結びつけるなど，ロマン主義にたいして批判的な立場のものだと言える。

なお，友人のマリア・ヴァン・リセルベルグによれば，ジッドはアンリオのインタビューを受ける前日，こう語っていたという——

> 芸術的観点においては，こうした質問は存在しない。芸術とは良いか悪いかであって，ロマン主義的かどうかはほとんど重要ではないからだ。その質問が私にとって興味深いのは，道徳的観点からなされた時に限る。〔…〕ロマン主義とは傲慢さである。完全さにたどり着くためには，謙虚さが必要であって，それをこそ私は古典主義的と呼ぶのだ。[28]

アンケートへの回答でジッドは古典主義を「道徳的な美点」として捉えていたが，そもそも彼にとって古典主義・ロマン主義とは「道徳的観点」から問われるべきものだったのである。ところで，こうした考え方はジッドにとってすでに親しいものだったと思われる。というのも彼は，先に引用した 1907 年の『日記』において，「ロマン主義音楽」を批判しつつ，ユゴーやワーグナーの「慎みのなさ」や「不誠実さ」といった「道徳的」な欠点を挙げていたからである。

回答にかんしてもう一点注目したいのは，「ナショナリスムと文学」でも言及された個性の位置づけである——

> 古典主義的完全さとは，個性の排除ではなく（私は「それとは逆に」と言ってしまいそうになるが），個性の服従，従属を含意する。語の文にたいする，文のページにたいする，ページの作品にたいする従属である。[29]

ナショナリストたちは古典主義を，個性をできるだけ「排除（supression）」することで成り立つもの，社会や共同体の安定化に役立つべきものとして捉えていた[30]。ジッドの「服従（soumission）」も一見するとこの文脈で理解できそうだが，決してそうではない。じじつ，古典主義に「制限や排除」を持ち込むことを，ジッドはモーラスの名をあげて批判している[31]。作品・文・語の相互関係が示すように，彼において個性の存在は「排除」されてはおらず，全体を構成する不可欠な要素なのである。

個性の重要性については，『新フランス評論』誌 1921 年 3 月号に掲載された

「アンジェルへの短信」で詳述されることになる。このなかでジッドは,「個人主義の勝利と古典主義の勝利とは混ざり合っている。そして個人主義の勝利は個性の放棄のなかにある」と述べる。それに続けて,1900 年に自身が行った講演「文学における影響について」の一節を引用し,「平凡になること」が「最も独自になること」につながると主張する[32)]。「平凡さ」を意識しながら思考し創作すること,それは万人に受け入れられている価値観を考慮に入れながら,使い古されたかに思える枠組みのなかで己の個性に向き合うことだ。そのことは同時に,自分の外に出ることでもあり,「自分自身も知らなかった自分の一部」[33)]を発見する契機となるものでもある。このような過程を経て見出されたものこそが真の「個性」であり,それは自分の独自性を存分に発揮せんとする「自惚れ」を抑えることによって獲得されるのだ。また,アンケートの回答の末尾でジッドは「真の古典主義者とは,心ならずもそうなってしまう人々,そうと知らずにそうなってしまう人々のことだ」とも述べている。理想に早く達しようとする欲望を捨てること,あるいは理想そのものを忘れてしまうことがそこに至るための唯一の道なのだ。ジッドの考える古典主義および個人主義の実現は,こうした逆説を孕んでいるのである。

ジッドが『ルネサンス』誌への回答で提示した反ロマン主義は,古典主義擁護である点,さらには個性の無軌道な発露を戒めるものである点で,たしかにモーラスらナショナリストたちの美学に近い。しかし彼らが忌み嫌う個人主義を古典主義の重要な要素と見なしている点において,その美学とは明確に対立するものだったのである。

19 世紀,神秘主義――(反)ロマン主義をめぐる争点の多様化

ラ・タイエードとモーラスの論争は,『ルネサンス』誌 1921 年 1 月 22 日号に掲載された前者の返答によりひとまず収束した[34)]。しかし本節で確認するように,古典主義とロマン主義をめぐる論争はこの後も繰り返され,それらを総括するためのアンケートもまた行われた。なお,ジッドの名は『ルネサンス』誌を最後に以後のアンケートには現れていないが,それは問題にたいする無関心ゆえではないだろう。というのも,古典主義美学やアクション・フランセーズのイデオロギーをめぐる考察は,当時書き進めていた『贋金つかい』(1926)のなかで重要な位置を占めているからである[35)]。

本節では，ジッドが不参加だった2つのアンケートを検討するが，先ずは『マルジュ』誌が行ったものから見ていこう。同誌はアンケート「19世紀は偉大な世紀か？」[36] を企画し，1922年5月号に回答を掲載した。このアンケートは，年頭にレオン・ドーデが刊行した『愚かな19世紀』を契機とする論争に反応したものだった。同書のなかでドーデは，19世紀を「自己責任の感覚」が大いに衰退した時代として批判する一方で，「精神面および言語面での奇抜さ」[37] と定義するロマン主義についても一章を費やして罵倒している。ここにおいて，ロマン主義批判の射程は19世紀そのものにまで，すなわちロマン主義とほぼ同時に始まり，その影響力があらゆる方向に行き渡っていった（とドーデらナショナリストが見なす）時代全体にまで広がったのである。

『マルジュ』誌のアンケートの特徴は，『ルネサンス』誌のそれと異なり，主催者が中立を表明していない点にある。じじつモーリス・ル・ブランは，ドーデを始めとする「新古典主義者」らの苛烈な19世紀批判が，「知性と文学の堕落」を引き起こしかねないと考え，その危険性を周知するためアンケートを実施したと述べている。そうした目的に叶うような回答者が選ばれたのかどうかは定かではないが，65人から得た回答の多くは，19世紀にいくつかの欠点を認めるにせよ，それでもやはり偉大な世紀だという穏当な結論に至っている。右派にもそうした傾向が見られ，モーリス・バレスも「私はそれ〔19世紀〕をなんと愛していることか！」と答えている。また，アクション・フランセーズに近く，反ロマン主義の立場を取ったゴンザグ・トリュックでさえ，民主主義などを批判しているが，19世紀の偉大さそれ自身は否定していない[38]。

「新古典主義者」たちの行き過ぎを諫めるための『マルジュ』誌の試みにもかかわらず，その後もロマン主義への激しい批判が止むことはなかった。かかる状況を憂い，ロマン主義の擁護を試みたのがアンリ・ブレモンである[39]。彼は神父の立場にあったものの，近代主義・神秘主義を基盤とした独自の神学により著作が禁書扱いとされるなど，カトリック教会との関係はしばしば緊張を孕んでいた。また，ナショナリストを「反キリスト教徒」[40] と見なすなど，アクション・フランセーズとも敵対関係にあり，その立ち位置は特異なものだった。そのようなブレモンが1923年末に世に問うたのが『ロマン主義のために』である。同書の新聞広告には「宣戦布告か？ いや，そうではなくこの一大文学論争における法定判決だ」[41] との煽り文句があり，それによっても論争に終止符を

打つものとして企図されたことが分かる。

しかし『ロマン主義のために』の刊行は，論争を再燃させる結果にしかならなかった。この論争を受けてアンケート「ロマン主義あるいは古典主義」を行ったのが『ベル・レットル』誌で，62 人分の回答が 1924 年 5・6 月号に掲載された。回答をとりまとめたモーリス・カイヤールによれば，反ロマン主義者たちの攻撃は，かえって彼らが擁護する古典主義の重要性を失わせることになるのではないかと思うほどに激しく執拗なものだった[42)]。

『ベル・レットル』誌のアンケートは，4 つの項目からなっており，それぞれの項目には複数の質問が含まれている。『ルネサンス』誌のアンケートの質問が，「ロマン主義であるべきか，それとも古典主義であるべきか」というような，簡潔で多方面に開かれたものだったのとは対照的である。この違いは，古典主義とロマン主義とをめぐる対立が同時代の様々な問題と結びつき，その掛け金が多様化・複雑化していったことの証左ではあるまいか。

そうした問題のひとつが「教条主義（dogmatisme）」と「神秘主義（mysticisme）」の対立である。最初の質問は以下のとおり――

> あなたは，エルネスト・セイエール氏や，ピエール・ラセール，アンリ・マシス両氏に与して，「教条主義」が宗教や文明にたいしてそうであるように，「古典主義」が芸術の永続性を確かなものにするだろうとお考えですか。あるいは，アンリ・ブレモン氏とともに，「神秘主義」こそが（あるいは「ロマン主義」こそが，と言ってもいいのです。というのも，この 2 つの語は氏にとってほぼ同じ価値を有しているように思われますので），文明・宗教・芸術をまとめて救うだろうとお考えでしょうか。[43)]

神秘主義は『ロマン主義のために』の鍵となるテーマのひとつだった[44)]。ブレモンにとって，ロマン主義と神秘主義はいずれも「我々の存在の奥深くの根源にその起源を持つもの」[45)] であり，彼はこれらを擁護した。一方で，ブレモン自身がカトリックの教義（ドグマ）をどのように捉えていたかについては，本稿の主旨からはやや外れるため詳述を避けるが，少なくともアンケートへの回答では「文学は教条主義を無視するものだ〔…〕。これ〔古典主義的精神〕を復興させることについてはいかなる利点も見いだせない」と述べ，文学的規範への従属を教条主義および古典主義の語と結びつけて批判している。ただしブレモンは，古典主義をひとまとめにして否定するのではなく，神秘主義と対立する性格を持つもの，すなわち「我々のうちの神秘的な源泉を枯渇させようとする」ような

古典主義を批判しているのである[46]。

ところで，カイヤールが示した図式，すなわち神秘主義をロマン主義に，教条主義を古典主義に結びつけ，両者を対立させる図式をそのまま受け入れている回答者はほとんど見当たらない。質問のなかで教条主義の擁護者として扱われた作家セイエール自身にせよ，自身の回答のなかでこの語を一度も用いておらず，むしろロマン主義が古典主義の礎となる可能性すら示唆している。詩人レオン・ボッケは，「神秘主義はロマン主義の根本的な一要素であるが，それなしでもロマン主義は存在する」[47] と述べる。また詩人ジャン・ロワイエールは，教条主義と神秘主義とが同居する例としてパスカルとボードレールを挙げている[48]。

その外の回答者も事情はほぼ同様である。すなわち，『ルネサンス』誌でのアンケートと同じく，古典主義・ロマン主義のどちらかに過度に肩入れすることなく，双方の融和の可能性を論じている。そうした回答のいくつかに，ジッドの反ロマン主義的古典主義観に通じる考え方が見受けられることは注目に値しよう。『ヌーヴェル・リテレール』紙編集長を務めたジルベール・シャルルは，『ルネサンス』誌に寄せたジッドの回答を「巧みで魅力的」と褒め，「古典主義的完全さ」で始まる数行を引用している[49]。また詩人・劇作家のヴィクトール＝エミール・ミシュレの「「古典的」になれるのは，最もそのように見えない者，とりわけそのようになろうとしない者だ」[50] なる指摘は，先にも引用したジッドの考え「真の古典主義者とは，心ならずもそうなってしまう人々，そうと知らずにそうなってしまう人々のことだ」に通ずるものがあるだろう。作家マフェオ＝シャルル・ポワンソは，「ロマン主義的方法を好む」と述べつつ，「すべての芸術家はみずからのうちに，自身を奮い立たせまた叱咤するこの〔古典主義とロマン主義の間の〕素晴らしい戦いを感じている」[51] と答える。ここにおいて，ポワンソは「古典主義とロマン主義との間の戦いは各人の精神の内部にもまた存在する」という視点をジッドと共有していると言える。とはいえ，彼が求めるのは両者の「同盟（alliance）」であって，「一方を排除することによって，もう一方が勝利すること」[52] を望んではいない。古典主義の「勝利」と，ロマン主義の「服従」「従属」とを理想としたジッドとはこの点で対立しているのである。

ジッドの名や，彼のものと類似した美学が回答の論拠として用いられていることを示すこうした事実から何を読み取るべきだろうか。たしかに 1924 年の時

点で「最重要の同時代人」[53] と評される存在ではあったが，以上の例だけからジッドの影響力の大きさを推し量ることは控えねばなるまい。とはいえ，ジッドの美学が古典主義やロマン主義を論じる際の説得的な根拠と見なされていたこと，あるいは少なくとも同時代において決して孤立したものではなかったことを示すものではあるはずだ。

「純粋さ」と反ロマン主義

古典主義・ロマン主義論争を再燃させたブレモンは，1925 年に再び論争の主役となる。純粋詩論争と呼ばれるこの新たな論争において，彼は自身の神秘主義神学に引き付けながら詩の理想的なあり方を熱心に論じた。この論争の火種は，遅くとも 1923 年末の『ロマン主義のために』出版の時点で準備されていたようだ。というのも，ブレモンは同書のなかで「ロマン主義を批判するいくつかのやり方は，真の詩とともに宗教そのものを危機に陥れるもののように私には見える」[54] と述べ，「真の詩」が憂慮すべき事態にあると主張しているからである。この点にかんしてカイヤールは，ブレモンが「ロマン主義の擁護よりも詩の擁護」[55] に熱心だと看破している。

純粋詩論争については，その概要のみを確認しておこう[56]。「純粋詩」とは，ブレモンの知人でもあったポール・ヴァレリーが[57]，リュシアン・ファーブルの詩集『女神を識る』（1920）への序文で用いた「純粋状態における詩」[58] に由来する語である。論争の直接の契機となったのは，ブレモンがこの語を用いて行った 1925 年 10 月 24 日のアカデミー・フランセーズでの講演である。ブレモンは，詩の理想である純粋詩は「定義できない」もの，「理性や想像や感受性」といった「不純」なものとは相容れないものだと考え，詩を含むあらゆる芸術は「祈り」をめざすものだと述べた[59]。これに対しポール・スーデーやアルベール・チボーデは，ブレモンの純粋詩理解を詩における理性の役割を軽視したものだと批判したが[60]，ブレモンはそれらにたいし逐一反論を加えている。

ジッドは，この論争については『日記』などに断片的な記述を残しているにすぎず，またそれをロマン主義と関連づけているわけでもない。にもかかわらず彼の反応が注目に値するのは，そこに彼の反ロマン主義の刻印を見てとることができるからだ。

ジッドは，ブレモンの演説に先立つ 1925 年 7 月，およそ 10 カ月にわたるコ

ンゴ旅行に旅立った。そのため，母国の文壇の様子を逐一追えていなかったようだ。純粋詩論争についてジッドが言及したのは，論争開始から半年以上が経過した1926年5月1日，フランスに帰国する直前のことで，「異常かつたいへん無意味な論争」[61] と切り捨てている。彼は，ブレモンに反論したスーデーを支持し，帰国後に書かれた『日記』のなかでも「ブレモンへの反論のなかで彼は金言を述べている」[62] と再度強調している。純粋詩をめぐるブレモンの考察を読むかぎり，ジッドの反ロマン主義とは多くの点で相容れないものだといえる。たとえば創造行為についての両者の考え方を比べてみれば，ブレモンは理性では制御しえない「神秘的次元の経験」[63] を詩作において重視する。これに対しジッドのほうは，理性が介在せずには実現しえない「秩序と節度」を芸術創造の要だと考えており，重点の置き方がまったく異なっているのだ。

両者はまた詩と音楽の関係の捉え方においても対立している――

> 彼の「詩ハ音楽ノヨウニ」は，ホラティウスの「詩ハ絵画ノヨウニ」くらいに詩にとっては危険なことだ。リズムと響きさえあれば〔詩は〕十分だとまで極言するのではなく，ひとつの詩が本質的に翻訳不可能なのはリズムと響きのためだと述べるにとどめておけばよいということが，彼には分からないのだろうか。[64]

意味などの要素を「不純」と見なし，詩の本質を「リズムと響き」に限定する行為を，ジッドは互いに独立したジャンルである音楽と詩とを混同するふるまいとして捉えている。実際，ブレモンは発端となった講演のなかで「詩人は外の誰にもまして，音楽家以外の何物でもない。詩と音楽，それは同じものだ」[65] と述べ，両者を同一視している。

ジッドによるこうした批判の意図を理解するためには，『贋金つかい』および『贋金つかいの日記』（1926）で提示された「純粋小説」概念を参照する必要があるだろう。「混交からは良いものはなにも得られない」と考え，「総合芸術」を嫌悪していたジッドによれば，純粋小説は「小説から小説に本来属さないものを取り除くこと」によって実現する[66]。詩においても同様のプロセスによって「純粋」が達成できるならば，ブレモンの言う純粋詩は，皮肉なことに，2つの点で「純粋」と見なせないのではあるまいか。まず，詩から詩に本来的に属さないものだけでなく，属するものも取り除かれている点において。次いで，その結果として，音楽という別の芸術ジャンルとの「混交」が起こっている点

においてである。

芸術の諸ジャンルを独立して取り扱うことの重要性は，1890 年代から準備され，1931 年になってようやく発表された「ショパンについてのノート」のなかでも強調されることになる――

> 私は，音楽を味わうのに，文学や絵画を介する必要性を全く感じないし，ある楽曲の「意味」なるものをほとんど気にしたことはない。意味は楽曲を狭めてしまい，私を不快にする。[67]

ショパンの楽曲は，作曲家の苦難に満ちた生や，曲が喚起するイメージとともに語られることが少なくない。たとえばピアニストのアルフレッド・コルトーは（ジッドは彼の演奏を厳しく批判したが[68]），『24 の前奏曲』のすべてに題辞をつけ，それぞれの楽曲に視覚的イメージや「意味」を与えた[69]。しかしジッドの考えに従えば，それらはショパンの楽曲を味わうには一切不要である。楽曲を構成しているのはあくまで音であって，それらに付随するイメージや，作曲者の伝記的事実などがつくりだす「意味」は本来的な要素ではない。「純粋小説」概念を援用するならば，これら「本来属さないもの」を通して楽曲を味わおうとすることは，音楽を「不純」にすることに外ならないと言えよう。「ショパンについてのノート」はこの原則に忠実なテクストであり，「文学や絵画を介する」ことを極力避け，もっぱら楽譜や演奏技法の観点からショパンについて語っているのである。

楽曲をそれ自身のみで味わうべきだと説くこうした主張にも，反ロマン主義を見ることは可能だろう。ジッドにとって，ロマン主義作家とは，饒舌であり，自分の感動を実際以上のものとして言葉を飾り立てる，「恥じらいと慎み」[70] を欠いた人々のことだった。語る対象をこのように歪めてしまうロマン主義作家のふるまいは，文学をはじめとする別ジャンルを通して音楽を味わう人々のそれに通じるのではあるまいか。というのも彼らは，「混交」によって楽曲を飾り立てることで，楽曲本来の味わいが失われることと引き換えに，強い感動を引き出し，それについて語ろうとするからだ。ジッドにとって，「不純」さを恐れず，対象を歪めることに躊躇（ためら）いのないこれらの人々もまた，「恥じらいと慎み」を欠いた，ロマン主義的「道徳」の持ち主だったのではないか。

一方で，すでに多くの先行研究が指摘するとおり，ジッドはショパン自身に

も反ロマン主義的な側面を見出している[71]。「ショパンについてのノート」の末尾を見てみよう――

> ショパンが自分自身であろうとは全くしていないように見える時ほど，ショパンがショパンらしいときはない。いかなる雄弁な展開も，音楽的着想を膨らませようとする欲望も，それ以上を得ようとする欲望も一切ない。あるのは逆に，自分の表現を，完璧に至るまで，極限まで単純化しようとする欲望なのだ。[72]

ジッドにとって,「ショパンらしい」ショパンとは，ロマン主義的な側面とは無縁の存在である。というのも,「それ以上を得ようとする」ような「慎みのなさ」からは遠く，また「個性的」であろうとする「自惚れ」もないがゆえに,「個性的」になれるからである。このことを前提とした上で，先の引用部の冒頭が,『ルネサンス』誌のアンケート回答の記述「真の古典主義者とは，心ならずもそうなってしまう人々のこと，そうと知らずにそうなってしまう人々だ」に呼応していることに目を向けよう。さらに,「個性的」という語を導きに,「アンジェルへの短信」の記述「個人主義の勝利と古典主義の勝利とは混ざり合っている」をも想起するならば，以下の結論が導き出せよう。すなわち，ジッドにとって，ショパンとは，反ロマン主義的であるがゆえに個人主義的で，したがって古典主義的でもある音楽家なのだ。

このように,「ショパンについてのノート」は二重の反ロマン主義をはらんだテクストである。言い換えれば,「ショパンについてのノート」とは，反ロマン主義的な音楽家としてのショパンについて，反ロマン主義的な「道徳」を守ったエクリチュールによって記述しようとする，その実践の軌跡と言って差し支えあるまい。

結　語

ジッドは，ロマン主義を古典主義によって超克されるべきものと見なし，後者の擁護者としての立場を明らかにした。しかし，アクション・フランセーズ一派に代表されるナショナリストたちが批判する個性・個人主義を重視することで，ジッドにとって偏狭と思われるこれらの美学からははっきりと距離を取った。それがゆえに，古典主義とロマン主義との共存を目指す考え方ともある程度の親和性を持ちえたと言えよう。一方で，超克されるべきロマン主義は,

「慎みのなさ」「自惚れ」といった創作態度としての「道徳」的価値と結びつけられ，否定的に扱われていた。本稿では，古典主義・ロマン主義をめぐる論争とは一見無関係に思えるブレモンの「純粋詩」概念にたいする反発や，「ショパンについてのノート」で展開される音楽観の背景にも，ジッドのこうした反ロマン主義的な「道徳」を読みとりうる可能性を提示した。

本稿では触れることができなかったが，ジッドの反ロマン主義は彼のドイツ観とも密接に関係している。ロマン主義がドイツ由来の文芸思潮と理解されてきたことから，反ロマン主義は，しばしば反ドイツ（反ゲルマン）主義と軌を一にし，偏見に満ちた排外主義的な言説を生み出すこととなった。ジッド自身も，個性や多様性を重んじたとはいえ，必ずしもそうした偏見から自由ではなかったように思われる。そのことはたとえば――第 1 次大戦中に書かれたテクストであることを考慮する必要はあるが――「〔ゲルマン人には〕劇作家も小説家もいない。〔…〕彼らは自分たち自身を描くすべも知らない」[73] の一節を含む「ドイツについての考察」などに看取できる。その一方で，ゲーテを高く評価し，ドイツ文化とフランス文化との融和を目指す姿勢を示すなど，ジッドのドイツにたいする姿勢は決して一面的ではない[74]。こうした相互に矛盾するかに見えるジッドのドイツ観が，どのように彼の反ロマン主義を支えているのかについては，稿を改めて論ずることとしたい。

註

1）André Gide, «［Réponse à l'enquête sur le romantisme et le classicisme］», in *Essais critiques*. Édition présentée, établie et annotée par Pierre Masson, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1999, pp. 279-280.

2）Voir Hugo Friedrich, *La Pensée antiromantique moderne en France* ［1935］. Édition critique par Clarisse Barthélemy et Traduction par Aurélien Galateau, Paris : Classiques Garnier, coll. «Études de littérature des XXe et XXIe siècles», 2015, pp. 240-245.

3）Voir Michel Murat, «Gide ou "le meilleur représentant du classicisme"», *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 107e année, n° 2, avril-juin 2007, pp. 313-330.

4）André Gide, *Journal I (1887-1925)*. Édition établie, présentée et annotée par Éric Marty, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, p. 13［14 mai 1888］. なお編者のエリック・マルティは，ジッドが前奏曲第 3 番と第 2 番とを

取り違えていると指摘している（voir « Notes et variantes », p. 1344）。

5）André GIDE, *Si le grain ne meurt*, in *Souvenirs et voyages*. Édition présentée, établie et annotée par Pierre MASSON avec la collaboration de Daniel DUROSAY et Martine SAGAERT, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2001, p. 271.

6）GIDE, *Journal I (1887-1925)*, *op. cit.*, p. 165［3 juin 1893］.

7）*Ibid.*, p. 258.

8）« Enquête sur l'influence allemande », *Mercure de France*, 1er novembre 1902, p. 335.

9）GIDE, *Journal I (1887-1925)*, *op. cit.*, pp. 571-572［22 mai 1907］.

10）Voir Stéphane GIOCANTI, *Maurras. Le Chaos et l'ordre*, Paris : Flammarion, coll. « Grandes Biographies », 2008, pp. 242-244. ラセール『フランスのロマン主義』の書誌情報は以下のとおり―― Pierre LASSERRE, *Le Romantisme français. Essai sur la révolution dans les sentiments et dans les idées au XIXe siècle*, Paris : Mercure de France, 1907.

11）『フランスのロマン主義』は 1907 年 3 月頃に刊出した。Voir « Échos », *Mercure de France*, 15 mars 1907, p. 384.

12）ジッドは，1907 年 6 月の『日記』で，ラセールを苛立ちとともに読み進めたと述べており，「激しい興奮によって，ぞんざいに書かれている」と評価している（GIDE, *Journal I (1887-1925)*, *op. cit.*, p. 573［16 juin 1907］）。また 1909 年 12 月に発表された「日付のない日記」では，ラセールを「党派的な作家」と呼んでいる（André GIDE, « Journal sans dates［décembre 1909］», in *Essais critiques*, *op. cit.*, p. 201）。

13）André GIDE, « Nationalisme et littérature（à propos d'une enquête de *La Phalange*）», in *Essais critiques*, *op. cit.*, p. 179.

14）Voir *ibid.*, p.177.

15）Voir André GIDE, « Nationalisme et littérature（second article）», in *Essais critiques*, *op. cit.*, pp. 192-195.

16）モーラスを中心とするアクション・フランセーズとジッドとの関係については以下を参照―― Michel DÉCAUDIN, *La Crise des valeurs symbolistes. Vingt ans de poésie française 1895-1914*, Toulouse : Privat, 1960, pp. 309-351 ; Auguste ANGLÈS, *André Gide et le premier groupe de « La Nouvelle Revue Française »*, 3 vol., Paris : Gallimard. 1978-1986 ; Jean-Michel WITTMANN, « Gide, un "anti-Maurras" ? », in *Le Maurrassisme et la culture. L'Action française. Culture, société politique (III)*. Sous la direction d'Olivier DARD, Michel LEYMARIE et Neil McWILLIAM, Lille : Presses Universitaires du Septentrion, 2010, pp. 99-109 ; 西村晶絵「アンドレ・ジッドとシャルル・モーラス――接近と離反の具体的様相――」，『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第 38 号，2021 年 3 月，39–52 頁。

17）大戦直後のフランスにおける反ロマン主義的言説については，以下を参照――

Éliane TONNET-LACROIX, *Après-Guerre et sensibilités littéraires (1919-1924)*, Paris : Publications de la Sorbonne, 1991, pp. 215-256 ; 吉澤英樹「文化相対主義の時代におけるローカルなモダニズムとしての古典の所在――ポール・モラン『ルイスとイレーヌ』(1924 年) を読む」, 松井裕美・木俣元一編『古典主義再考Ⅱ 前衛美術と「古典」』, 中央公論美術出版, 2021 年, 127-155 頁。

18) « Pour un parti de l'intelligence », *Le Figaro. Supplément littéraire*, 19 juillet 1919, p. 1.

19) Julien BENDA, « L'éternelle idole », *Le Figaro*, 9 mars 1920, p. 1.

20) Jacques RIVIÈRE, « La Nouvelle Revue française », in *Une Conscience européenne 1916-1924*, Paris : Gallimard, coll. « Les Cahiers de la NRF », 1992, pp. 129-130.

21) Jean MORÉAS, « [Manifeste de l'École Romane] », *Le Figaro*, 14 septembre 1891, p. 1.

22) Raymond de LA TAILHÈDE, « La Poésie », *La Renaissance politique, littéraire, artistique*, n° 32, 4 septembre 1920, pp. 24-26.

23) CRITON, « Une Défense du romantisme », *L'Action française*, 10 septembre 1920, p. 3.

24) « Enquête sur le romantisme et le classicisme », *La Renaissance politique, littéraire, artistique*, n° 2, 8 janvier 1921, p. 1.

25) フォールは「私は古典主義者か？ ロマン主義者か？ 私にとってはこれらの語はいかなる意味も有していない」(*ibid.*, p. 9) と述べ, またランソンは次のように述べている――「現在において, 古典主義者であるか, あるいはロマン主義であるかはもはや何も意味しない。古典主義を無視すること, もしくはそこに閉じこもることは, いずれも等しく常軌を逸した態度である」(*ibid.*, p. 12)。

26) ラセールはロマン主義を 19 世紀という「偉大な時代」の「弱点」と見なした (*ibid.*, p. 13)。

27) たとえば劇作家のフランソワ・ド・キュレルは「古典主義とロマン主義は, いがみあうのではなく, 兄弟のように抱擁しあうほうがよい」と述べている (*ibid.*, p. 8)。

28) [Maria VAN RYSSELBERGHE], *Les Cahiers de la Petite Dame. Notes pour l'histoire authentique d'André Gide* [éd. Claude MARTIN], t. I, Paris : Gallimard, coll. « Cahiers Andre Gide » n° 4, 1973, pp. 61-62.

29) GIDE, « [Réponse à l'enquête sur le romantisme et le classicisme] », *op. cit.*, p. 279.

30) Voir FRIEDRICH, *op. cit.*, pp. 53-55.

31) Voir André GIDE, « Billet à Angèle [mars 1921] », in *Essais critiques*, *op. cit.*, p. 284.

32) *Ibid.*, p. 281. なお二宮正之は, この主張の背景にロマン主義に批判的な立場をとった文学史家フェルディナン・ブリュンティエールからの影響があると指摘している (voir Masayuki NINOMIYA, « Gide et Bruntière », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 70e année, n° 2, mars-avril 1970, pp. 258-259)。

33）André GIDE, « De l'influence en littérature », in *Essais critiques*, *op. cit.*, p. 406.
34）Voir Charles MAURRAS et Raymond de LA TAILHÈDE, *Un Débat sur le romantisme*, Paris : Flammarion, 1928, p. 8.
35）Voir WITTMANN, art. cité（19e et 20e paragraphes）.
36）« Le XIXe siècle est-il un grand siècle ? », *Les Marges*, 2e série, nº 95, 15 mai 1922, pp. 6-53.
37）Léon DAUDET, *Le stupide XIXe siècle. Exposé des insanités meurtrières qui se sont abattues sur la France depuis 130 ans 1789-1919*, Paris : Nouvelle Librairie Nationale, 1922, pp. 11 et 82.
38）« Le XIXe siècle est-il un grand siècle ? », art. cité.
39）ブレモンにかんする伝記的事項は以下を参照―― *Encyclopédie universalis*, Paris : Encyclopædia Universalis, t. III, 1988, pp. 490-492 ; 上智学院新カトリック大事典編纂委員会『新カトリック大事典』第 4 巻，研究社，2009 年，475 頁。
40）Jacques PRÉVOTAT, *Les Catholiques et l'Action française. Histoire d'une condamnation 1899-1939*, Paris : Fayard, 2001, p. 272.
41）*Le Figaro*, 3 décembre 1923, p. 7.
42）« Romantisme ou Classicisme », *Belles-Lettres*, nº 59-60, mai-juin 1924, p. 394. なお，表紙に記された表題は「古典主義とロマン主義（Classicisme et Romantisme）」だが，記事の表題に準拠した。
43）*Ibid.*, p. 396.
44）同時代に刊行されていた『カトリック神学事典』には「神秘主義（mysticisme）」の項目はないが，「神秘学（mystique）」の項目はある。それによれば，神秘的な神の認識は「理性的で論証的な，推論による認識」に対立する（voir *Dictionnaire de théologie catholique*. Sous la direction d'Alfred VACANT, Eugène MANGENOT et Émile AMANN, Paris : Librairie Letouzey et Ané, 1929, t. X, 2ème partie, p. 2600）。ブレモンのロマン主義・神秘主義擁護も，こうした対立図式のもとで，すなわち「理性」偏重の芸術様式・神学にたいする批判的言説として捉えられるだろう。
45）Henri BREMOND, *Pour le romantisme*, Paris : Librairie Bloud & Gay, 1923, p. IX.
46）« Romantisme ou Classicisme », art. cité, p. 416.
47）*Ibid.*, p. 412.
48）Voir *ibid.*, p. 457.
49）Voir *ibid.*, pp. 435-436.
50）*Ibid.*, p. 449.
51）Voir *ibid.*, pp. 452-453.
52）Voir *ibid.*, p. 453.
53）『ヌーヴェル・リテレール』紙 1924 年 10 月 25 日号に掲載されたアンドレ・ルーヴェールの記事の副題でこの表現が用いられた（André ROUVEYRE, « Les Lettres dans l'époque. X. Le contemporain capital : André Gide », *Les Nouvelles Litté-*

raires, 25 octobre 1924, p. 4)。詳細は以下を参照―― Frank LESTRINGANT, *André Gide l'Inquiéteur*, Paris : Flammarion, coll. « Grandes Biographies », 2012, t. II, pp. 243-250. なお訳語については以下に準拠――吉井亮雄『ジッドとその時代』，九州大学出版会，2019 年，186 頁。

54）BREMOND, *Pour le romantisme*, *op. cit.*, p. VIII.

55）« Romantisme ou Classicisme », art. cité, p. 470.

56）純粋詩論争の経緯や主たる論点については以下を参照―― Clément MOISAN, *Henri Bremond et la poésie pure*, Paris : Les Lettres Modernes, 1967 ; William MARX, *La Naissance de la critique moderne*, Arras : Artois Presses Université, 2002, pp. 113-128 ; Paola CATTANI, « La Formule "poésie pure" dans le débat des années vingt et trente : variantes, circulation, significations et équivoques », *Romanic Review*, volume 109, n° 1-4, janvier-novembre 2018, pp. 277-290 ; François TRÉMOLIÈRES, « Brémond et la "poésie pure" : l'enjeu mystique d'une querelle littéraire », *Romanic Review*, volume 109, n° 1-4, janvier-novembre 2018, pp. 291-305.

57）ブレモンとヴァレリーは 1922 年 6 月 8 日にシャルル・デュ・ボス宅で知り合い，その際に「純粋状態における詩」について語り合ったとされる。Voir［Michel JARRETY, « Introduction au "Discours sur Henri Bremond" »］in Paul VALÉRY, *Œuvres*. Édition de Michel JARRETY, 3 vol., Paris : Librairie Générale Française, coll. « Livre de Poche », 2016, t. II, p. 849.

58）Paul VALÉRY, « Avant-propos［à *Connaissance de la déesse*］», *Œuvres*, *op. cit.*, t. I, p. 757.

59）Voir Henri BREMOND, *La Poésie pure. Un débat sur la poésie*, Paris : Grasset, 1926, pp. 15-27.

60）スーデーが行った反論のうち代表的なものは以下を参照―― Paul SOUDAY, « La Poésie pure », *Le Temps*, 26 octobre 1925 p. 1 ; « Encore la poésie pure », *ibid.*, 2 novembre 1925, p. 1. またチボーデについては『新フランス評論』誌に掲載された以下の時評を参照―― Albert THIBAUDET, « Poésie », *La NRF*, 1er janvier 1926, pp. 104-113 ; « Épilogue à la *Poésie de Stéphane Mallarmé* », *ibid.*, 1er novembre 1926, pp. 553-561.

61）André GIDE, *Le Retour du Tchad*, in *Souvenirs et voyages*, *op. cit.*, p. 651［1er mai 1926］.

62）André GIDE, *Journal II (1926-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Martine SAGAERT, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1997, p. 8［14 juillet 1926］.

63）BREMOND, *La Poésie pure. Un débat sur la poésie*, *op. cit.*, p. 75.

64）GIDE, *Le Retour du Tchad*, *op. cit.*, p. 651［1er mai 1926］.

65）BREMOND, *La Poésie pure. Un Débat sur la poésie*, *op. cit.*, p. 23.

66）André GIDE, *Journal des Faux-Monnayeurs*, in *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*. Édition publiée sous la direction de Pierre MASSON, avec la collaboration de Jean CLAUDE, Céline DHÉRIN, Alain GOULET et David H. WALKER, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, t. II, p. 543 [1er novembre 1922].

67）André GIDE, *Notes sur Chopin*. Édition de Michaël LEVINAS, Paris : Gallimard, 2010, p. 64.

68）コルトーが演奏するショパンの『24 の前奏曲』をレコードで聴いたジッドは,「官能性が欠けている。その代わりにあるのは優美さと感傷だ」,「ショパンが歪められているように思われた」と述べている（GIDE, *Journal II (1926-1950), op. cit.*, p. 160 [30 octobre 1929]）。

69）たとえば第 1 番の題辞は「トリスタンを狂おしく待つイゾルデ」, 第 4 番は「墓の上に」となっている（voir Auguste MANGEOT, « Salle des Agriculteurs. Mme Maria Freund et Alfred Cortot », *Le Monde musical*, 15 mai 1914, p. 159）。

70）GIDE, « Billet à Angèle [mars 1921] », *op. cit.*, p. 283.

71）ジッドのショパン観に見られる反ロマン主義的および古典主義的側面については以下も参照のこと―― Augustin VOEGELE, *Musique et désir chez André Gide*, Paris : Classiques Garnier, coll. « Bibliothèque gidienne », 2020, pp. 281-312.

72）GIDE, *Notes sur Chopin*, *op. cit.*, p. 66.

73）André GIDE, « Réflexions sur l'Allemagne », *La NRF*, 1er juin 1919, p. 39.

74）Voir Claude FOUCART, *André Gide et l'Allemagne, À la recherche de la complémentarité (1889-1932)*, Bonn : Romanisticher Verlag, 1997.